



にんじんを収穫しました

武蔵ヶ丘小3年生は、8月から学校の隣の畑でにんじんを大切に育ててきました。水やりや草取りも交代でがんばって行いました。

1月12日に、にんじん作り名人の内藤静紀さん(花立)と地域学校協働活動推進員の協力の下、収穫しました。大きなものや細長いものなど、さまざまな形のにんじんをたくさん収穫し、持ち帰りました。家庭では、家族と協力してにんじん料理にも挑戦しました。児童たちにとってとても貴重な体験ができました。



にんじんを収穫する児童たち

球磨川を辿りて険し坂本の道の 駅復興飯店舗に着く
半月もキャベツ採らずに待ちおれど手触り柔く出荷遅れる
家建ちて緑の畑は返らざり大地の嘆きを吹く風に聞く
語らひて心晴れやか新たな生きる力の湧き出づるかな
刈り終えし田には一羽の白鷺が空を見上げて身動きもせず
白波を蹴立てて船は進み行き添い飛ぶカモメは前に後ろに
古民家の暖簾くぐれば幼日のままごと遊びが蘇りくる
氷点下四度の朝はフクロウのようにふくれて寒気に向かう

短歌会

冬至晴ものの種飛ぶ未知の空
朝の空明けてびつくり雪の花
大阿蘇に向ひどんの勢い立つ
三密や避けつつ集ふお元日
歳晚の箱を跳び出づ車海老
問診を書く指凌ぎ寒絡む
コロナ禍で笑顔の消えしマスクかな
書留めで帰れぬ児等へお年玉
切り干しや盗まれしごと乾しあがり

去年今年コロナ広がり止められず
咲き初めるままに朽ちぬや凍椿
コロナ禍の数の多きや寒に入る
サンタの絵牛の絵もある児の賀状
手のひらに風花乗せておつかいに
燃へ尽くることなき夜のシクラメン
冬菊の堅き蕾の闇を解く
病む夫と思ひ辿りぬ冬星座

菊陽句会報

きくよう文芸

有久 賢治
梅田 國雄
佐藤せい子
中村 正市
中村トシエ
馬場 礼子
山口 静子
松本 東亜

田中 郁子
佐藤 澄世
北川しんじ
福田 貴子
高橋 孝子
寺尾千代子
原野レイ子
財津 早雪

人権啓発標語 「耳すまし 心の声を 聞き合おう」

菊陽西小学校 6年 中山 あかり

「わたしは負けない」を学習して 菊陽南小学校 4年 中俣 嵐



勇気をもって伝えよう (作者は前列左から2番目)

「わたしは負けない」の学習をして、学んだことは、差別は人と人を、はなすものだという事です。心に残ったことは、コンパスの先でつくえに、「〇〇のみんな学校にくんな。」と、ほってあったことです。なぜなら、この言葉は、人と人とはなす言葉だと思ます。その地区の人だけが、学校に来てはいけないということは、おかしいと思ます。それに、コンパスでほると、消せなくなってずっと、残ったままだからです。ぼくは、ほった人が、ゆるせないと思ました。

主人公の「わたし」が差別に気づき、全校集会で、「わたしは負けません。何があっても差別に立ち向かって生きていきます。みんなも差別をなくすために、いっしょにがんばってほしいのです。」とうったえていったところも心に残りました。ぼくは、この出来事について、「わたし」は勇気の

ある人だと思ました。ぼくは自分の気持ちを、伝えるのが苦手です。気持ちを伝えるときは、不安な気持ちになってしまいます。なぜなら、みんなの反応が気になったり、きんちょうしてしまったりするからです。そのことで、言葉が出てこなくなります。友だちから「遊ぼう」と、さそわれたことがありました。でも、ぼくは、ブランコで遊びたかったけど、ことわれませんでした。ことわれなかった理由は、ことわったときの周りの反応が、気になるからです。そのとき、なぜかぼくは、気持ちを、伝えられなかった自分にくやしくなりました。そういう思いをしたくないと思ました。だから、ぼくは、「わたしは負けない」にでてくる「わたし」のように、おかしいことに気づき、どうしようと、言えるようになりたいです。

(担任より)

「わたしは負けない」の「わたし」の立ち上がりと自分を重ね、これからどうしていきたいのかを考えることができました。普段の生活でも自信をもって話をしている姿が少しずつ増えてきました。これからもその気持ちを忘れないようにしてほしいです。

「3月3日」、今日はどんな日?

「3月3日」、今日はどんな日か?と調べてみると、最初にかいてあるのが、「桃の節句」・「ひな祭り」、「耳の日」ということでした。それ以外に、3月3日は、菊陽町の子どもたちが使う社会科の教科書にでてくる記憶にとどめておきたい日でもあります。「新しい社会6年(歴史編)」p-125の本文には、「また、明治に入って身分制度が改められてからも、就職や結婚などで差別され、苦しめられてきた人びとは全国水平社をつくり、差別をなくす運動に立ち上がりました。」とあります。加えて、右のような小見出し記述もあります。

今から、99年前の1922年3月に差別をなくす全国的な立ち上がりがあったことが記載されています。細かくみると、その日は3月3日だったのです。差別をなくす全国的な運動が組織されたことは「水平社の全国大会差別撤廃を叫ぶ」、「正義と人道に立脚して世の不合理的をせめる水平社創立大会」などの見出しで日本の新聞各紙で報道されました。海外でも「In March, 1922, 2,500 delegates...in Kyoto and formed the Suiheisya, literally, the Water-level Society...」(1922年3月京都に代表2,500人が集まり文字どおり「水平社会」を意味する水平社を創立した)と報道されました。このときの大会での宣言は水平社宣言と言われ、「日本で初めての人権宣言」、「誇りうる文化財」といわれています。それは宣言にある「人間は尊敬すべきもの」であるという考え方からです。「差別する」の反対語は「尊敬する」です。**差別をなくし、人間を尊敬しあえる社会づくりを高らかに宣言した日**が「3月3日」です。

山田少年の差別をなくすうったえ

1922年3月、京都市岡崎の公会堂で、全国水平社の創立大会が開かれました。この大会では、人間を差別する言動はいっさい許さない、と決議され、各地から集まった代表者たちは、その喜びと決意を口々に述べました。少年代表者である16才の山田少年は、差別の現実を報告し、「差別を打ち破りましょう。そして光り輝く新しい世の中にしましょう。」とよびかけました。



水平社創立記念の碑 (京都市左京区岡崎)